2023年

# マナ通信

今月のマナ通信

◎５月の週日の聖書日課　（テサロニケ人への手紙Ⅰ・Ⅱ、ダニエル書、
テモテへの手紙Ⅰ・Ⅱ、ホセア書、他）

◎土曜日・日曜日の学び　神が造られた世界　　からの感想です。

テサロニケはエグナティア街道沿いにある最初の主要都市でマケドニアの首都であった。そこにはかなりのユダヤ人、サマリヤ人が住んでいた。２度目の伝道旅行おいて、ちょうど３週間にわたって説教をし、ユダヤ人とギリシャ人の間で多くの回心者が起こされるという収穫を得ていたその矢先、ユダヤ人の指導者たちはねたみに駆られ、町のならず者をけしかけて暴動を起こしました。そのため、パウロとシラスは、夜のうちにテサロニケを後にしてベレヤに逃げたのです。

その後、パウロはテモテからの報告でテサロニケ教会の人々が苦難の中でも固く信仰に立って歩んでいると聞く一方で、淫らな行いをする人たちがいると云うことを知ります。その為、パウロは「神のみこころは、あなた方が聖なる者となることです。」と勧めたのです。当時のギリシャ世界では、不品行や性的乱れは特に珍しくない身近な問題でした。そのような世の道徳感覚に惑わされずに、自分の体を聖なる尊いものとして、保ちなさいと云うのです。

話は変わって、パウロはテサロニケの人々の心配事すなわち、イエスが再臨される前に死んだ人々について心配していることを知っていたので、人は死んだらどうなるかについて教え人々を励ますことに大きな意欲を燃やしていました。

「眠っている人たちについては、兄弟たち、あなたがたに知らずにいてほしくありません。あなたがたが、望みのない他の人々のように悲しまないためです。イエスが死んで復活された、と私たちが信じているなら、神はまた同じように、イエスにあって眠った人たちを、イエスとともに連れて来られるはずです。私たちは主のことばによって、あなたがたに伝えます。生きている私たちは、主の来臨まで残っているなら、眠った人たちより先になることは決してありません。すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。」

（Ⅰテサロ4:13-18）

イエス様が地上に来られたのは、我々の罪の為でした。受肉され、人間としてこの世に来られ、我々人類の罪をその身に包含して死んで下さったのです。人間として、罪人として死なれたイエス様、どんなにつらく、情け無かっただろう・・・、イエス様は罪を犯した事が一度も無かったのです。それなのに、人間からも見捨てられ、見くびられていたのです。

あのペテロが、鶏が鳴く前に３回イエス様のことを知らないと云ったのです。他の弟子はその場を去ったのです。逃げたのです。けれども、十字架上の死に至る態度を見て解る人には解ったのです。あの千人隊長が十字架を見あげて「やはりイエスは神の子であった」と云ったのです。

イエス様は父なる神のご計画に従順に従い罪の贖いをしてくださったのです。他人の為に命を落とす人はいません。神は我が子の命を犠牲にしてまで罪の赦しを人間に与えたのです。なんという憐れみでしょう。なんという愛でしょう。人間は神によって造られたのです。

イエス様は死んで墓に葬られました。しかし、三日後に生き返ったのです。復活しました。イエス様は復活の初穂となって下さいました。それは、我々人間も復活してイエス様の後に続く為です。罪のトゲは抜き去られ、悪魔は退散させられました。



人間は死ねばからだは土に戻りますが、霊は天に昇ります。そして、天の「待合室」でイエス様が再臨されるのを待っておられるのです。その時、まず死んだクリスチャンが生き返ります。それから、生きている人が空中で主と出会い天に引き上げられるのです。

その後、地上では大患難時代が７年間続きます。ありがたい事にクリスチャンは報いの座につき神から褒められ、天上にいて地上の大患難とは関わりのない者としてくれたのです。

我々の本籍は天国です。我々は、いま、地上という天国の大使館にいるのです。大使としての役目を終えれば本国に帰ります。その時、死に別れた人との再会をはたします。

福島兄弟の感想文の中にも、慰めの第二として、キリスト者にとって、地上の別れは悲しみを残すものだけでなく、天の御国での再会を待つ希望の別れでもあります。とありました。クリスチャン万歳と思わず両手を挙げずにはおられません。（畑中伸之）

これがキリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」（Ⅰテサロ5:18b）

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことにおいて感謝しなさい 。」（同5:16-18a）

「いつも喜んでいなさい」と言われても、嬉しいこと、楽しいことがあったら喜べますが、嫌なこと、苦しいことがあった時には喜べません。しかし、みことばは「いつも喜んでいなさい」と言われています。どうしたらそんなことができるのかと思います。

その鍵は18節にあると思います。「キリスト・イエスにあって」です。私の力ではいつも喜んでいることはできませんが、キリスト・イエスにあるならばできるのです。

「キリスト・イエスにあって」とは、具体的には、イエス様が私のために十字架にかかって死んでくださった「その恵みにあって」ということだと思います。

イエス様は私のために喜んで命を捨ててくださいました。私はこのイエス様にあって、罪の赦し、永遠のいのち、神の豊かな恵みを受けました。これは、何にも代えがたい喜びです。イエス様を信じたことによってこの恵みを受けました。

私が救われてからの日々を思い返す時、十字架上のイエス様を見上げ、御名を呼びつつ祈り、感謝と平安で満たされ、心が守られてきました。このイエス様のことを考える時、心に元気が与えられます。

私はイエス様にあって最もすばらしい恵みと祝福をいただいているのですから、この世で遭遇する様々な問題や苦しみは、取るに足りないことと感じます。

このイエス様にあっていつも喜んでいるためには、しっかりとつながっていなければなりません。そのために「絶えず祈りなさい」という勧めが続いております。

いのちの源である主から、いのちと力を頂く生活、クリスチャン生活はなんと感謝なことかと思います。

この愚かな私が、救いの恵みに与っていなかったら、どんな人生であったかと思わずにはおれません。

使徒パウロが苦難の中にあっても、喜び、祈り、感謝できた秘訣は、キリストが彼のうちに生きてくださっていた、彼に代わって生きておられたという、驚くべき救いの証しですね。

ますます励まされます。（福島三弥子）

高齢になりいつか教会の礼拝の出席も、かなわなくなる時もくると思います。私は礼拝に出席しているということに依存して満足しているのではないかと、気付きました。

礼拝に参加しているだけでは、主の僕ではありません。ダニエルと三人の友人のように、人知では奇跡と思える事態においても、主に信頼していられるだろうか。残念ながら自信を持って、「はい」とは言えません。

教会の高齢化と無牧の教会の増加を、前にして、信仰の先輩たちの伝道の働きに安住してしまったなあと、申し訳なく思います。

一日一日主にある平安を、自分自身が心の底から持ち続けて、周りの人にも伝えて行かれるように、御言葉に養われたいと思います。（広瀬裕子）

俗悪で愚にもつかない作り話を避けなさい。むしろ、敬虔のために自分自身を鍛錬しなさい。」

（Ⅰテモテ4:7）

「パウロが『自分自身を鍛錬しなさい』とテモテに語ったのは、決して禁欲的に修行しなさいということではないでしょう。」「自分自身を鍛錬しなさいとは、自分が何か特別な存在になることを目指すのではなく、主イエスが歩まれた歩みに従うように自らを方向づけることにほかなりません。」（みことばを味わおうより）

私はこれらの解説になるほどと思いました。「敬虔」や「鍛錬」という言葉から、私はついつい修行は自己研鑽を連想してしまいがちですが、主を慕い求めること、主を愛すること、主が私を愛してくださっているように自分を愛し、さらに人を愛することがクリスチャンの鍛錬なのだなと思いました。

信仰の鍛錬ができますよう、聖霊様のお力が生かされますように、祈ります。（永井亮子）

ヤコブ書4章5節「神は、私たちの内に住まわせた御霊をねたむほどに慕っておられる」

これを読むならば、私などは、三位一体の神なのだから、父神が御霊をねたむほどに愛しておられるのは当然でしょう、と理解していました。

ところが、山岸昇訳では「神が私たちの中に住まわせられた御霊は（私たちを）ねたむほどに慕っておられる」となっていて、主語と目的語が違っているのです。

これは大きな違いであり、それだからこそ、「あなた方のうちに良い働きをはじめられた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださる」という御言が、自分で自分を完成するのではなく、御霊が私たちをねたむほどに愛してくださるので、御霊が完成させてくださるという、しっかりとした意味を成すことになると思います。

これは「肉の弱さ」の項で言われている「私たちがキリストにあるとしても、成長するということが残されている。そのためには、怠惰と戦って、聖書を読み、真理を学び、瞑想し、自分の霊的機能を訓練して、真理への理解を得ようと強く求めなくてはならない。もし本気で願うなら、御霊があなたを助けに来てくれることは確実である。そうするなら、恵みばかりでなく、主の知識においても成長するであろう」と言って下さった先輩たちの努力による成果なのだと思います。感謝します。

次に問題になるのは、自分がそれをしているか、です。ある訳の通読だけではなく、何冊かの聖書を読み比べるなり、信仰書などをもっと読まなくてはならないなと思うようになりました。そして、そのモチベーションを維持しなくては、と思います。聖霊が助けてくださいますように。（高橋美枝）

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことにおいて感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」（Ⅰテサロ5:16-18）

何の良い行いもない罪人の私が、罪の赦し・永遠のいのち・天の御国といった驚くべき救いを無償で受けました。その結果、内側から湧き出てくるものは「喜び、祈り、感謝」です。

数ヶ月前までは身体のどこも異常がなかったのですが、最近、歩くのが少し困難になったのを実感しております。そんな状態の中でも、上記のみことばが語られます。いつも喜び、絶えず祈り、すべてのことにおいて感謝しなさい、と。

喜ばしい時はもちろん、つらく苦しい時も、神様は決して私たちを見放さず、絶えず心に留めて支えていてくださるから、と励まされます。さらに御霊を消してはいけませんと述べ、私たちの内に与えられている聖霊の働きを止めてはいけないと命じています。

平和の神ご自身が、私たちを完全に聖なるものとし、主イエス・キリストの来臨の時、私たちの全存在が神の前に完全に責められるところのないものとしてくださいます。

私も、どんなに今、自分の信仰が心もとないと思っていても、主の再臨の日に責められることのない者にしてください、と祈ります。

「あなたがたの間で一生懸命働き、何か間違いがあれば親身になって忠告してくれる人たちを尊敬しなさい。その人たちは、何とかしてあなたがたの手助けをしようとしているのですから。彼らを認め、心から愛しなさい。」（Ⅰテサロ5:12-13／LIV訳）。何と感謝なことでしょう。

聖霊の励ましです。「すべて真実なこと、すべて尊ぶこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと等、受けたこと、学んだこと、聞いたこと、見たことを行いなさい。そうすれば、平和の神があなたがたとともにいてくださる。」（ピリピ4:8-9）（木村邦夫）

終わりの日には困難な時代が来ることを、承知していなさい。」（Ⅱテモテ3:1）

パウロが生きていた時も、また、今の私たちが生きている時も、相変わらず、困難な時代が来ることを、承知していなければなりません。

キリスト者として、神に喜ばれることは何であるか。また、神に従順になるにはどのようにすれば良いか。日々、教えていただきながら、過ごしてゆきたいと願います。（外處トミ）

困難な　時代の中を　歩みゆく
この身はやすし　主が内に住む

2023年5月31日

群馬県前橋市の敷島公園のバラ

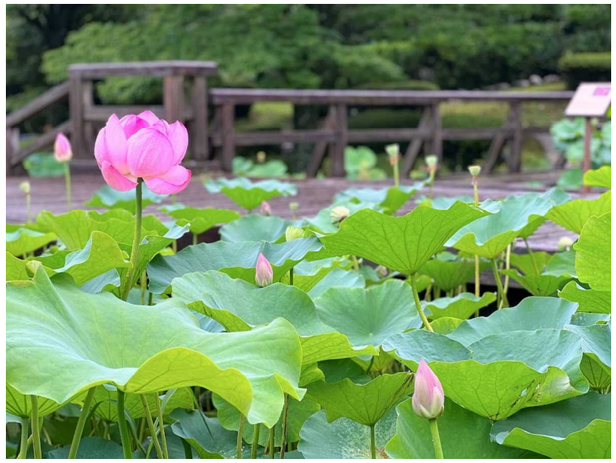
いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなたがたに求めておられることである。」（Ⅰテサロ5:16-18）

私たちのためにその命を捨て、そしてよみがえられたイエス様は、私たちにこれらを求めておられると言われます。

休まず働いてお金持ちになりなさいとも決して病気になってはいけませんとも言われません、時には忘れてしまうかもしれませんが、イエス様に救われ生かされていることを覚えて、感謝し祈りつつ歩んでいきたいです。（外處光歩）

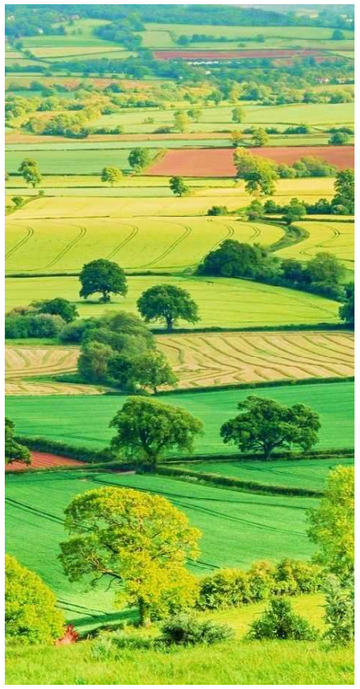
いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことにおいて感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」（Ⅰテサロ5:16-18）
つらいときも苦しいときも、神様は決して私たちを見放さず、絶えず支えてくださっていることを覚えて感謝します。
いつも喜び、絶えず祈り、すべてのことにおいて感謝する日々を送れるよう、いつも主に目を向けて歩んでいけたら幸いです。（外處結実）

書によってであれ、ことばによってであれ、私たちから出たかのような手紙によってであれ、主の日がすでに来たかのように言われるのを聞いても、すぐに落ち着きを失ったり、心を騒がせたりしないでください。どんな手段によってでも、だれにもだまされてはいけません。」（Ⅱテサロ2:2,3）
インターネットを通じて膨大な情報が溢れており、その中から事実を見分けることは容易ではありません。聖書にも記載されている終末の始まりに起こる戦争やききんのうわさも最近特に現実的になってきたかのような情報が増えてきました。
患難時代が近くなっているという世界状況の中で、ついそれらに気を取られてしまいがちになってしまいますが、聖書には心を騒がせてはならないとも記載されています。
創造主によって救われ、導き続けてきていただいた確信と、やがての御国への希望だけが、心の騒々しさを鎮めてくれます。
全てを私たちにとっては最善としてくださる主に、心から感謝致します。（外處徳昭）



私は、私を強くしてくださる、私たちの主キリスト・イエスに感謝しています。キリストは私を忠実な者と認めて、この務めに任命してくださったからです。
13 私は以前には、神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者でした。しかし、信じていないときに知らないでしたことだったので、あわれみを受けました。14 私たちの主の恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに満ちあふれました。
15 「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。16 しかし、私はあわれみを受けました。それは、キリスト・イエスがこの上ない寛容をまず私に示し、私を、ご自分を信じて永遠のいのちを得ることになる人々の先例にするためでした。
17 どうか、世々の王、すなわち、朽ちることなく、目に見えない唯一の神に、誉れと栄光が世々限りなくありますように。アーメン。」（Ⅰテモテ1:12-17）

1章1-11節では、挨拶に続いて、エペソで信者たちに律法を負わせようとしていたにせ教師たちのことを述べています。そして、12節からは、使徒パウロ自身の回心を思い起こしています。
12-17節には、律法の正しい用い方が、パウロ自身の経験に基づいて説明されています。律法は、彼にとって、救いの方法ではなく、罪を自覚する手段でした。
まず第1に、彼は、ご自分の恵みをもって力を与えてくださる「キリスト・イエス」に感謝をささげています。タルソのサウロが主のために何をしたかではなく、主が彼のために何をしてくださったかが強調されています。
パウロは、主イエスが自分を救ってくださったばかりか、「忠実な者と認めて」主の務めに任命してくださったことに対する驚きを決して忘れることができませんでした。律法はこのような恵みを１度も示したことがなく、罪人サウロに死刑の宣告を下しただけでした。
彼は自分のことを、「以前には、神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者でした。」と述べています。
「神を冒瀆する者」として、彼はキリスト者たち、また彼らの指導者イエスに関して悪口を言っていました。「迫害する者」として、彼はキリスト者たちを処刑しようとしました。この新しい宗派によって、ユダヤ教が脅威にさらされると思ったからです。彼は、邪悪な計画を実行しつつ、信者に対する暴力的かつ非道な行為に喜びを見出していたのでした。
「しかし」、このようなパウロは「あわれみを受けました」。「信じていないときに知らないでしたことだったので」、当然受けるべき罰を受けずにすんだのです。
彼は、キリスト者たちを迫害していた時、自分は神に仕えていると思っていました。自分の両親から、まことの神を礼拝するように教えられていた彼は、キリスト信仰は、旧約のヤハウェなる神に反するものである、と結論づけることしかできませんでした。彼は、キリスト者を殺すことによって、全力で神の名誉を守ろうとしたのです。
主の恵みがパウロに授けられたのは無駄ではなかったことが「キリスト・イエスにある信仰と愛」ということばによって示されています。
15節の「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」は、牧会書簡に5回出て来る「真実のことば」の一番初めのものです。この「ことばは真実」です。それが神のことばだからであり、神は、嘘をつくことも、間違いをされることもあり得ないからです。人は、全体的な信頼を持って、このことばを信じることができます。
これを信じないことは理にかなわず、愚かなことです。これは「そのまま受け入れるに値するもの」です。なぜなら、すべての人に当てはまるからであり、神がすべての人のために何をなさったかを告げているからであり、すべての人に救いの賜物を差し出しているからです。



「キリスト・イエス」ということばは、私たちの主の神性を強調しています。天から来られたお方は、まず第1に神（キリスト）であられ、そして人（イエス）であられます。救い主が先在しておられたことが、「この世に来られた」ということばに示されています。
ベツレヘムで、このお方が初めて存在されたのではありません。主は永遠の昔から父なる神とともにおられましたが、特別な任務のために人としてこの世に来られたのです。西暦2023年と言う場合、キリストがこの世にお生まれになった日を紀元としているのであり、カレンダーの数字もこの事実を証言していることになります。
なぜキリストは来られたのでしょうか。「罪人を救うため」でした。正しい人を救うためではありません（正しい人は、ひとりもいません）。律法を完全に守った人を救うためでもありません（律法を守れた人はひとりもいません）。
ここで私たちは、真のキリスト信仰と他のすべての教えの違いの核心に触れることになります。にせ宗教は、「人には、神に受け入れられるために自分でできることがある」と教えます。
福音は、「人は罪人であり、失われており、自分で自分を救うことはできず、天国に行くためには、主イエスの十字架のみわざによる以外に方法はない、と教えます。
パウロは1章の前半で説明したような律法の教えには、肉の性質が働く余地がありました。それが人に語ることは、自分が自らの救いのために何かしらの貢献ができる、ということです。
しかし、福音が主張している通り、人には罪を犯すこと以外に何もできないのであり、救いに必要なすべてのことは主イエスが行われたのです。
神の御霊によって、パウロは、自分が「罪人のかしら」であることを悟るに至りました。パウロが「私はその罪人のかしらです」と、過去形ではなく、現在形で語っています。敬虔な聖徒ほど、自分の罪深さを強く自覚しています。
使徒パウロは、「主イエスを信じて永遠のいのちを得ることになる人々の先例」となりました。どんなに邪悪な者であったとしても、だれも絶望する必要はないことを示しています。
今日も、どんな罪人も罪を悔いて主のみもとに来れば、同じように恵みとあわれみにあずかる救いがあるということです。何と感謝なことでしょうか。（福島勲）

貴重なご感想ありがとうございました。
次回はマナ６月号の感想を７月１０日までに福島兄弟へお寄せ下さい。（畑中）